東方放浪記

片仮名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方放浪記

【Ｎコード】
Ｎ５０８７Ｚ

【作者名】
片仮名

【あらすじ】
幻想を追い求めたがために幻想となった青年。
青年は幻想の地で様々な事件に巻き込まれる。
それは本人の意思に関わらず。
日常から異変へ、異変から日常へ、移り変わるたびに彼は何を思い、何を感じるのだろうか。

幻想入り

突然のことだった。
朦朧としている頭の中に語りかけてくる、女性の声。
――まだ、生きたい？

俺は、伝説や伝承、噂話が好きで日本各地を飛び回っていた。
その日もネットに書かれていた噂、
『異世界と繋がる神社！？』
そんなものに興味を持ち、その場所へと行った。
現地へ着いても、何の異変も感じない。
何の変哲もない神社だった。
「やっぱり、ハズレか……」
そりゃ、そうだわな。
小説の世界じゃあるまいし、異世界と繋がるなんてね。
あってほしいとは、思っても実際にはそんなことあるわけないと思っている自分がいる。
でも、空気はきれいで、厳かな雰囲気だからくる価値はあったな。

そんなことを思いながら、さっさと帰りますか、と石段を降りようとした瞬間、

「あ、れ？」

疲れていたのだろうか、一瞬意識が飛んだ。
しかし、その一瞬でも石段に踏み出そうとした俺の足が踏み外すには十分だった。

目の前に石の壁が迫る。

「ぐっ、うっ！？」

ガン、ゴン、と身体中をぶつけながら、転がり落ちていく俺。
意外と長かった石段を最上段から勢いよく転がり落ちた身体はかなりボロボロだった。

打撲だけならまだ良かったのかもしれない。
しかし、どこかで打ちどころが悪かったのか、頭からドクドクと血が出ている。
そのせいか意識がもうろうとして、身体が動かない。

転げ落ちて死ぬなんてなぁ……。
友達に話したら笑われるな、こりゃあ。
ここら辺は人もあまり通らないだろうし。
まだ、色々やりたいこととかあったんだがな。

そんなことが一瞬の間に頭の中をよぎる。
死ぬ瞬間って本当に時間がゆっくりになるんだな、一回でも妖怪や

らなんやら、そんな感じの生き物に会ってみたかったな、などと思いながら、

意識を手放し――

――あなた、まだ生きたい？

あ？

――生きたい？

なんだ、この女性の声は。

――時間が無いの。答えて。生きたい？

そりゃあ、ね。まだまだやりたいことは色々あったし。

――そう、生きたいのね？

もう何回もうるさいな、俺はまだ生きたい！でも、もう死ぬんだよ

！見たらわかるだろ！

――いいえ、あなたは死なないわ。私が連れて行くのだから。

はぁ？何言って……。

――ようこそ、幻想郷へ。幻想好きな人間さん？

そこで、本当に意識を手放した。

幻想入り（後書き）

なんかもう色々と唐突で短いですね！すいません！
ありがちな展開。死んで幻想入り。

幽霊で入れようか、半人半霊で入れようか、いまだに迷ってます。
霊が入るのは確定なのかって？
そりゃそうでしょう。死んでるんですもの。

現状確認

ん、むぅ。
腹減った……、って
「……っ！？」
どうな、った。
死んだ、よな。俺。
転んで、頭打って、血ぃダバダバで。
そこで、そのあと……。
「っ痛！」
頭いてぇ。頭打ったことは確定っぽいなぁ。
だけどそっからが思いだせない。

そして、自分の名前は。
やべぇ、これも思い出せない。
俗に言う記憶喪失ってやつか？
自分がなるとは思わなんだ。
忘れちまったもんはしょうがないか……。
両親には悪いことをしたかな。
その内、思いだせるといいんだが……。

とりあえず、ココはどこだ？

辺りを見渡すと、桜・桜・桜。
一面、桜の木だ。

キレイダナー、と今までは見たこともないほど、咲き誇っている桜を見ていると、

一本だけ、目につく桜の木（と思われるもの）があった。
他の木とは、何というか大きさが違うせいか、迫力が全く違う。

しかし、大きさ云々よりも気になることがある。それは、

「この木だけ、咲いていないなぁ」

そう、咲いていない。先ほど、思われる、とつけたのはそのためだ。
周りが桜ばかりだから、おそらく桜の木だとは思うけど……。

「その桜の木は西行妖といってな、咲くことがないのだ」

「うひゃい！？」

「何を素っ頓狂な声を上げておる」

後ろに、白髪の剣士、かな？刀持ってるし。
そんな感じのお爺さんが居た。

いや、そりゃあいきなり見知らぬ人に話しかけられたらビックリするでしょうよ！
変な声を上げたのは、うん。聞かなかったことに……。

「いきなりだが、お主が外から来た逢坂薫（オウサカ カオル）でよいかな？」

本当にいきなりだな。
んでもって、オウサカカオル、ねぇ。

「えっと、すいません。それが俺の名前なんでしょうか？」

全く聞き覚えがない。

「一応、八雲のにはそう聞いたのだがな」

そう言うと、お爺さんは少し困った顔をした。
八雲の？まぁいいか。

「自分、記憶喪失になってしまったみたいで、名前を思い出せないんですよね。えっとその八雲のさん？は自分のことを知っているっぽいので多分、それで良いんじゃないかと」

「ふむ。とりあえず薫殿と呼ばせてもらう。儂は主人である西行寺幽々子様の剣術指南役兼ここの庭師の魂魄妖忌という。妖忌でいいぞ」

とりあえず、自分の名前は逢坂薫らしい。それが分かっただけども結構な収穫だ。

名前ってのは大切だからな。まぁ、自分で思い出さない限りは親不孝者になりそうだけど。

「こちらこそ宜しくお願いします」

まずは挨拶。そしていきなり色々な事があって聞きそびれたがこれを聞こう。

「それでなんですが、……自分はどうしてここにいるんですか？」

そう、これが聞きたかった。何故自分はここにいるのか。死んだはずではないのか。

意外にも自分は冷静で、落ち着いて聞くことができた。

「それは儂からは話せんよ。八雲のに聞くことだな。あやつのやることは突飛すぎてよく分からん」

妖忌さんは呆れた感じで溜息をつきながら話した。

苦労人っぽいな、この人。

「とりあえずはついてきなさい。屋敷に幽々子様もいらっしゃるし、お主の聞きたいことを知っているだろう八雲もいる」

そう言うと、妖忌さんは歩きだした。

ついていくしか、ないよな。他にどうしようもないし。

そう思い、俺は西行妖を横目に妖忌さんについていった。

どうでもいいけど、八雲の、じゃなくて、八雲が名前だったんだな。

恥ずかしい……。

現状確認（後書き）

一話でどのくらい描けばいいのか分からねー！
とか思いながら、書いている片仮名です。

とりあえず、魂魄妖忌さんの登場です。
設定がほとんどないので良くあるイメージの白髪のお爺さん。

幻想入りした時期は妖夢が居る前、大結界張った後、って感じです。
結構間ありますがね。そこらへん結構あいまいです。

これからやりたいことはなんとなーく決まってます。
旧作に絡ませたり。旧作ほとんど知らないけどね！
だもんで今、色々調べてます。

明確なプロットはないし、ストックもありません。
が、頑張っていきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5087z/

東方放浪記

2011年12月19日01時50分発行